

調査報告

外国にルーツをもつ児童の発達アセスメントと言語の問題について —発達障害と一時的リミテッド状況の鑑別のための調査研究—

松田真希子・中川 郷子^{注1}

要 旨

現在日本の小学校の特別支援学級には数多くの外国にルーツを持つ児童(CLD児童)が在籍している。CLD児童は一般的に一時的なダブルリミテッド状況にあるのか機能的障害なのかの見分けがつきにくく、特別支援学級に誤配置されるケースが多く見られる。特に集住地区である東海地区においては、多くのブラジル国籍の児童が特別支援学級に在籍している。本研究では、日本の学校の特別支援学級に在籍、または発達障害と見られている日系ブラジル人児童6名に対し、ポルトガル語と日本語の言語能力調査と、ポルトガル語と日本語による知能検査(WISC-IV)を行った。その結果、IQ、行動観察共に障害がないと思われる児童が2名いた。また、CLD児童は言語相補的にパフォーマンスが現れる可能性があることが明らかになった。この結果よりバイリンガルテスターによる発達アセスメントを行う必要性があることが示唆された。

I. はじめに

21世紀に入り、国際的な労働移動や移民の増加に伴う社会問題が地球規模で起こっている。その中の問題の一つが移住と移動の繰り返しによる子どもの言語習得と教育のアーティキュレーションの問題である。

外国にルーツを持つ児童はCLD児(Culturally and Linguistically Diverse Children)と呼ばれている。こうしたCLD児童は現在日本の学校(一条校)に約75,000人存在する(2009年文部科学省学校基本調査)。更にインターナショナルスクールや民族学校を入れれば約14万人いると推定される。

CLD児童は複数国の間の教育のアーティキュレーションのために2つ以上の言語を習得する必要があること、また異なる学校制度や文化に適應する必要があること等様々な教育コストを抱えている。多くの場合、移動に伴い、学校在籍期間の長期化、

学期のずれに伴う不就学、学習内容のずれ、学習言語能力の異なりなどの教育問題が発生している。

こうした教育問題と連動した結果、一般にCLD児童は複数言語を習得する過程で、モノリンガル児童に比べ知能の発達が遅れがちである。イタリアでは同じ学習障害を持つ児童の知能をWISC-IV^{註2}で調べた結果、バイリンガル児童はモノリンガル児童に比べ、知能全体の値と、ワーキングメモリーの値が低いことが報告されている (Riva et.al 2017)。Cummins (1979)は複数の言語を獲得していく過程で、どの言語も年齢相応のレベルに達しない状況にあることを一時的リミテッド状況と述べている。またバイリンガル児童が二言語習得でどちらも下のしきいを超えない場合、認知的にマイナスになり、二言語が上のしきいを超えると認知的にプラスになると述べている。

こうした一時的リミテッド状況による発達の遅れと発達障害の鑑別は非常に難しいと言われている(中島)。現在、南米日系CLD児童において、この言語能力と発達障害の鑑別問題が顕在化している。NPOカエルプロジェクトはサンパウロ市で帰国した日系CLD児童の教育支援をしているプログラムである。2009年からはカエルプロジェクト・セミナーとして毎年日本の日系集住地区約10か所で保護者の教育相談を行ってきた。日ポバイリンガルの臨床心理士であり、プロジェクト代表の中川はその相談活動を行う中で、多くの日系CLD児童が特別支援学級に在籍していること、その比率が日本人の発達支援学級の児童より多く存在することが明らかになった。

しかし、実際にそうした子どもたちと中川が面談すると、バイリンガル児童の言語習得における一時的な言語未発達な状況(リミテッド状況)と判断できるケースが多く見られた。つまり、誤った判定で特別支援学級に配置されているCLD児童がいるといえる。

日本のCLD児童の発達アセスメントに関する研究は近年始まったばかりで、具体的な研究は松井(2017)の日本生まれの日系外国児(5歳)を対象とした調査等僅かである。そこで、本研究では、このような特別支援学級に在籍するCLD児童の言語能力や認知能力は本当に障害として認定されるレベルなのかについて、二言語言語能力テストとバイリンガルテスターによる知能検査によって実情調査を行い、その結果について報告する。そして、誤判定が出る原因について考察する。

II. 調査概要

調査対象者の属性を表1に示す。対象者は東海地区在住の日系ブラジル人児童(男児)6名である。全員発達障害の疑いがあるとされ、1名を除き特別支援学級または通級指導を受けている。本調査では、知能検査(ポルトガル語版WISC-IV)と2言語能力

調査(『ことばのテストえほん』)を実施し、その後保護者に対する面談調査を実施した。また一部行動観察も行った。シンヤのみWISC-IVと二言語調査が実施できずRCPM レーヴン色彩マトリックス検査(J.C. Raven他1993)のみ実施した。またキヨシのみポルトガル語版だけでなく日本語版WISC-IV(日本版 WISC-IV 刊行委員会2011)と併用した。

言語調査では『ことばのテストえほん 新訂版 言語障害児選別検査』(田口・小川口1987)の言語理解問題を使用し、二言語で解答を得た。採用した理由は1時間かかるWISC-IVと併用するため、短時間で回答できるものが望ましかったこと、児童むけに作成されていること、二言語でも対応可能なことによる。調査では、二言語共通問題として絵の中にあるモノの名前を二言語で答えさせた(図1)。その後二枚の異なる状

表1 調査者の属性(名前は全て仮名)

名前	年齢	出生地	家庭内言語	移動歴	在籍状況など
シンヤ	9歳	日本	ポルトガル語	検査のためブラジルに一時帰国した経歴あり	日本の小学校の特別支援学級に在籍。ブラジル医師による発達障害の診断あり
キヨシ	12歳	ブラジル	ポルトガル語	6歳で来日	日本の中学校の普通学級に在籍。以前から学校関係者に特別支援学級への移動を勧められているが保護者が同意していない。
ジュン	10歳	日本	ポルトガル語	4歳で帰伯 9歳で再来日	日本の小学校の普通学級に在籍。発達障害の通級指導あり
コウタ	9歳	日本	ポルトガル語		日本の小学校の特別支援学級に在籍
ヒデオ	9歳	日本	ポルトガル語		日本の小学校の特別支援学級に在籍。医師による発達障害の診断あり
タケシ	12歳	ブラジル	ポルトガル語	9歳で来日	ブラジル学校に在籍。1学年下に在籍し、特別な支援を受けている

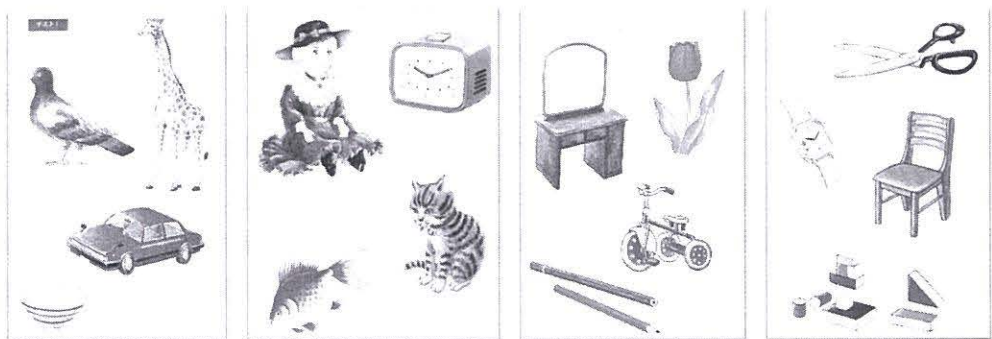


図1 二言語語彙調査に用いたページ(『ことばのテストえほん』pp.1-4.)

況の描かれた絵を説明させた(図2)。いずれも最初にポルトガル語、次に日本語の順番で質問した。6名への調査は全て中川が行った。調査の内容は録音し、後日中川と松田で検証作業を行った。

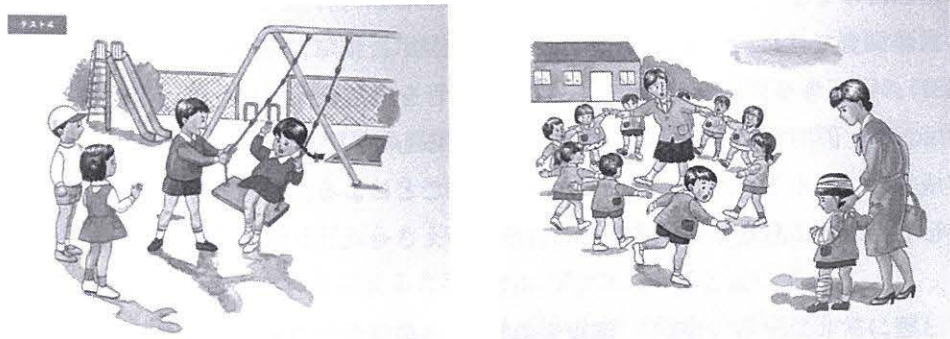


図2 状況説明に用いた絵カード(左はポルトガル語、右は日本語で描写させた)
 (『ことばのテストえほん』pp.12-13.)

Ⅲ. 全体の結果

結果の概要を表2に示す。発達アセスメントの診断の確定には更なる検査を要するため、断定はできないが、6名中1名だけが今回の調査でも障害が見られた。一方、キヨシ、ジュンの2人は今回の調査では、発達障害ではない可能性が高い結果となった。コウタ、ヒデオ、タケシの3名には発達に遅れが見られるが、その遅れが発達障害につながるものか一時的なりミテッド状況かはわからないという結果となった。すなわち、確実に特別支援学級の対象となる児童はシンヤ1名であり、残り3名は状況によって配置される可能性ありという結果となった。

シンヤとヒデオにはすでに医師の所見があった。シンヤはブラジルの医師から自閉症の診断が出ており、WISC-IVの実施も不可能であったため、言語能力に依存しないレーヴンマトリックス検査のみ実施した。パーセントイル順位は25%で、低位であった。ヒデオは日本の病院で発達アセスメントを受けており、その時の医師の所見はADHDであった。しかし、知能検査や行動観察の結果、その疑いはあるが、そうではない可能性も見られた。疑いのある三人の中で最も大きな遅れがあるのはタケシであった。タケシは今回の調査で、知的障害に近い傾向が見られた。以降の章で結果について詳述する。

表2 調査結果概要

	二言語能力検査	WISC-IV結果 (FSIQ (Full Scale Intelligent))	全体結果
シンヤ	実施できず	実施できず	障害あり (医師の所見と一致)
キヨシ	ポ 上級 日 中級	FSIQ 101 *二言語実施	障害がない可能性あり
ジュン	ポ 上級 日 中級	FSIQ 108	障害がない可能性あり
コウタ	ポ 中級 日 初級	FSIQ 87	障害の疑いあり
ヒデオ	ポ 初中級 日 上級	FSIQ 84	障害の疑いあり
タケシ	ポ 中級 日 初級	FSIQ 77	障害の疑いあり

IV. 二言語能力調査

次に二言語能力調査結果を表3～表6に示す。子どもの年齢、態度等の問題もあり、全ての調査者に同一の質問ができなかったが、知能検査の解答状況や行動観察など全体を考慮した結果、以下の結果となった(表3)。

表3 二言語調査結果

	優勢言語	言語レベル
シンヤ	ポのみ	ポ 初級?
キヨシ	ポ>日	ポ 上級 日 中級
ジュン	ポ>日	ポ 上級 日 中級
コウタ	ポ>日	ポ 中級 日 初級
ヒデオ	日>ポ	ポ 中級 日 上級
タケシ	ポ>日	ポ 中級 日 初級

ヒデオを除く全員、ポルトガル語が優勢であった。キヨシとコウタはポルトガル語が堪能な調査者で、語彙テストもほぼ満点であり、絵の描写もポルトガル語は問題なく行えた。ジュンは語彙検査の回答数が少なく、状況描写も実施していないが、ポルトガル語で唯一三輪車を”triciclo”と解答し、チューリップも花ではなく”tulipa”と答えているところから、一定のポルトガル語の語彙力があることがうかがえる。また後述する知能検査の言語理解問題もポルトガル語で十分に年齢相当の解答ができていた

ため、ポルトガル語能力に問題はないといえる。

ヒデオは日本語のほうが堪能であった。語彙テストも質問数は少なかったが、「フランス人形」「金魚」のような詳細な解答が行えていた。絵の描写でも「骨折してる子に」と連体修飾句を用いていること、時制やアスペクトの選択も正確に行えていることから日本語能力が高いことがうかがえる。

表4 日本語語彙テスト結果

(「-」は質問せず, ×は無回答または「わからない」と解答。指差しは0.5点計算)

	正答	キヨシ	ジュン	コウタ	ヒデオ	タケシ
1	鳩(鳥は0.5)	とり	指差しで○	×	はと	×
2	キリン	きりん	指差しで○	×	きりん	くま
3	車(自動車)	くるま	-	車	くるま	×
4	茶碗(皿は0.5)	×	-	×	ちゃわん	さら
5	人形 (フランス人形)	×	-	×	ふらんす にんぎょう	×
6	目覚まし時計 (時計は0.5)	とけい	-	とけい	とけい	とけい
7	魚(金魚)	さかな	-	さかな	きんぎょ	さかな
8	猫	ねこ	-	ねこ	ねこ	ねこ
9	鏡	×	-	×	-	×
10	花, チューリップ	はな	はな	×	-	×
11	三輪車 (自転車は0.5)	じてんしゃ	-	×	-	じてんしゃ
12	鉛筆	えんぴつ	-	えんぴつ	-	えんぴつ
13	腕時計 (時計は0.5)	とけい	-	とけい	-	とけい
14	はさみ	はさみ	-	はさみ	-	はさみ
15	いす	いす	-	いす	-	いす
16	ブロック (おもちゃ, ブロッ コは0.5)	おもちゃ	ブロック	ブロッコ	-	×
正答数(最大16)		10.5	3	7.5	7	7
正答率(%) (正答/質問数)		65.6	75	46.9	100	43.8

表5 ポルトガル語語彙テスト結果

(「-」は質問せず、×は無回答または「わからない」と解答)

	正答	キヨシ	ジュン	コウタ	ヒデオ	タケシ
1	pombo (passaro, corujaは0.5)	passaro	-	pombo	coruja	ponvo
2	girava	girava	-	girava	×	girava
3	carro	carro	-	carro	carro	carro
4	tigela (plato, poteは0.5)	Pote	-	plato	plato	plato
5	boneca (brinquedoは0.5)	boneca	-	boneca	brinquedo	boneca
6	despertador (relógioは0.5)	relógio	-	despertador	relógio	relógio
7	peixe	peixe	-	peixe	peixe	peixe
8	gato	gato	-	gato	gato	gato
9	espelho (comodaは0.5)	comoda	-	espelho	-	espelho
10	tulipa (florは0.5)	tulipa	tulipa	flor	-	flor
11	triciclo (bicicletaは0.5)	biciclte	triciclo	bicicleta	-	bicicleta
12	lápiz	lápiz	-	lapis	-	lapis
13	relógio de pulso (relógioは0.5)	relogio de pulso	-	relogio	-	relógio
14	tesoura	tesoura	tesoura	tesoura	-	tesoura
15	cadeira	cadeira	-	cadeira	-	cadera
16	blocos (brinquedosは0.5)	brinquedos	blocos	blocos	-	brinquedos
	正答数(最大16)	15.5	4	15.5	6	14
	正答率(%) (正答/質問数)	96.9	100	96.9	75	87.5

またジュン、ヒデオ、コウタからは日本語の発音にポルトガル語の影響がほとんど見られなかった。このことはこの3名が日本生まれであることと無関係ではないだろう

う。キヨシとタケシは日本語の発話にポルトガル語の影響が強く見られた。

キヨシとコウタの絵の描写は日本語も不正確であり、コウタについては、描写内容も不正確であることから、日本語能力は高くないと言える。特にキヨシは中学校1年生であることを考えると中学校の学習についていける日本語力ではなく、発達の遅れが疑われる可能性はあるといえる。

表6 絵の描写結果(斜体はポルトガル語を中川が翻訳したもの。()は中川の質問)

キヨシ	P1	公園で、この女の子がブランコで自分で気持ち良く遊んでるのに、この子がけんかぶっかけてきて、とりあげようとしてる。そしたらそれを見てる二人がやめなさいと男の子にいつている
	P2	ポルトガル語でもいえないよ。この人がこの子どもはけがしてーそしてまたあのようえんちにかえったね。かえったときに、あのみんながこの人、この子はこの子のともだちね。そして先生がみて、なんかーかわいそうって思って、そしてあの、病院にいったね。この人たちは遊んでいた、幼稚園ね。そしてお母さんは連れて行った。
コウタ	P1	これが公園で一けんかして、なぜかという、この子が乗りたかったのにー、この子が先に乗っちゃった
	P2	なんか一足がなんかー <i>não sei</i> (それから、ここはどこなんでしょうね)幼稚園(であとは?)先生(先生がいて)お母さん(お母さんがいて)、あとは幼稚園の人が、なんか頭がいたい?と(どうしちゃったんだろうね。この子)ころんじゃった(ころんじゃった?)ころんじゃってーこれがめっちゃテレビにーまえみてー頭が悪いになった
ヒデオ	P1	この子がけんかしてる。公園にいる。(だれがけんかしてる?)この男の子とこの女の子
	P2	この子が骨折して、でこの子が悲しんでて、この子が骨折してる子に大丈夫って言うてる。(ここはどこ?)幼稚園。

V. 知能検査(WISC-IV)の結果

WISC-IVの結果を表7~11, 図3に示す。WISC-IVは100を基準とし、100であれば、同年齢の子と同等の力があると見なされる。90-109が平均となっている。80-89が平均の下、79より下は知能が低いとされている。表7, 表8より、ジュンとキヨシは全ての知能のスコアが平均以上であることが確認された。コウタとヒデオは言語理解とワーキングメモリーの値が平均より低いが、それ以外のスコアは平均以上であった。タケシはワーキングメモリーが平均以上で、それ以外は全て平均より低かった。

図3のグラフより、タケシを除く全員が言語理解とワーキングメモリーの値が知覚推理と処理速度の値に比べ相対的に低くなる“N”型となっていることがわかる。これより、タケシが他4名とは異なるタイプであることが予想される。

また、ワーキングメモリーの値が³相対的に低くなる現象はRiva et.al (2017)の結果と一致していた。

表7 WISC-IV結果(キヨシ：ポルトガル語+日本語)

	下位検査の 評価点合計	パーセンタイル		95%信頼区間
		合成得点	順位	
言語理解(VCI)	27	95	37	88-103
知覚推理(PRI)	34	108	70	100-115
ワーキングメモリー(WMI)	19	97	42	90-104
処理速度(PSI)	21	103	58	94-112
合計(FSIQ)	101	101	53	96-106

表8 WISC-IV結果(ジュン：ポルトガル語)

	下位検査の 評価点合計	パーセンタイル		95%信頼区間
		合成得点	順位	
言語理解(VCI)	32	104	61	96-111
知覚推理(PRI)	39	118	88	110-124
ワーキングメモリー(WMI)	18	94	34	87-102
処理速度(PSI)	2	105	63	95-113
合計(FSIQ)	111	108	70	103-113

表9 WISC-IV結果(コウタ：ポルトガル語)

	下位検査の 評価点合計	パーセンタイル		95%信頼区間
		合成得点	順位	
言語理解(VCI)	19	78	7	72-87
知覚推理(PRI)	30	100	50	93-107
ワーキングメモリー(WMI)	9	68	2	63-77
処理速度(PSI)	25	115	84	104-122
合計(FSIQ)	83	87	19	82-92

表10 WISC-IV結果(ヒデオ：ポルトガル語)

	下位検査の 評価点合計	パーセンタイル		95%信頼区間
		合成得点	順位	
言語理解(VCI)	18	76	5	70-85
知覚推理(PRI)	26	92	30	85-100
ワーキングメモリー(WMI)	16	88	21	82-96
処理速度(PSI)	18	95	37	87-105
合計(FSIQ)	78	84	14	80-89

表11 WISC-IV結果(タケシ：ポルトガル語)

	下位検査の評価		パーセンタイル	
	点合計	合成得点	順位	95%信頼区間
言語理解(VCI)	23	86	18	80-94
知覚推理(PRI)	16	71	3	66-80
ワーキングメモリー(WMI)	17	91	27	84-99
処理速度(PSI)	13	80	9	73-91
合計(FSIQ)	69	77	6	73-83

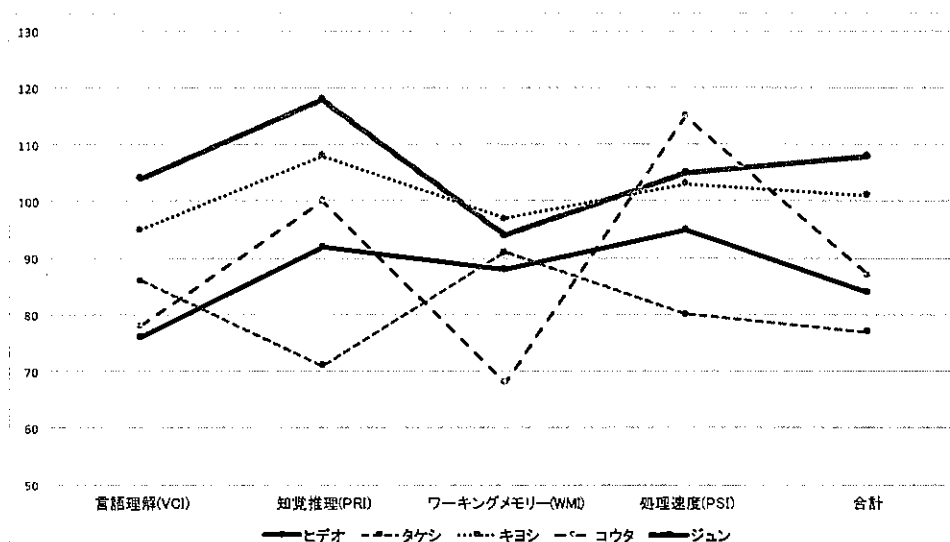


図3 WISC-IV合成得点の分布

VI. 考察：知能検査の誤判定が起こる要因

調査の結果、キヨシとジュンの2名については知能検査の値は全て平均以上であった。また平均以下の値もあるが、ヒデオのように発達障害の疑いが弱い児童も見られた。CLD児童で、知能検査で誤判定が出る要因として以下の4つが考えられる。

- (1) 児童の得意なほうの言語で知能検査が行われていない
- (2) 複言語で実施されていない
- (3) 言語理解とワーキングメモリーは、言語能力の影響を強く受ける
- (4) 通訳の能力の問題

(1)についてはジュンとヒデオが該当する。ジュンはポルトガル語能力の方が強い児童である。ポルトガル語版のWISC-IVを実施した結果、数値には全く異常が見られなかった。しかし日本の小学校では発達障害が疑われ、通級指導を受けている。

逆にヒデオについては、日本語能力のほうが優勢な児童であった。今回ヒデオに対してポルトガル語のWISC-IVしか行わなかったことで、言語理解(ICV)が76と低く現れてしまった可能性がある。それ以外については低めではあるが、確実に障害があると認定されるほどではなかった。また、ヒデオは行動観察でもADHDの傾向はあまり見られなかったため、一時的な言語未発達な状況(リミテッド状況)である可能性がある。

(2)はキヨシが該当する。キヨシは、二言語のWISCで実施したことでパフォーマンスが向上した例である。キヨシについては、ポルトガル語で解答に詰まった時点で、日本語に切り替えて同じ問題を問いかけた。すると、その後の解答が2問、3問と続けて得られた。その後日本語で解答に詰まったためポルトガル語に戻すと、また解答が2問、3問続いた。その言語交代は一度ではなく二度、三度と起こった。そのためどちらかの言語だけで実施するのではなく、何度か切り替えながら実施することになった。

キヨシは言語形成期前期(6歳)に日本に移動したCLD児童である。こうした回答の傾向から、キヨシについてはいつ、どこで、どの言語でその課題遂行能力を獲得したかによって、言語相補的にパフォーマンスが出現している可能性がある。すなわち、この事例は、CLD児童の中には、二言語で均等にパフォーマンスが行えるのではなく、単言語で行える言語行動を、相補的に獲得している児童がいるということを示唆している。

こうした児童については、どの言語を使って答えても良いといったTranslanguaging (Garcia2009)な方法で試験を実施し、「一番よいパフォーマンスを採用する」という方策をとる必要がある。それが行われない場合は、誤判定になる可能性がある。ユウヤは一言語だけの知能検査であれば、どちらの言語で実施しても障害がある児童と認定されてしまう可能性が高い。

(3)については、タケシ以外の4人に該当する。WISC-IVの言語理解では概念の類似や単語の意味説明などを行う問題が課される。例えば、類似問題では「りんごとバナナは何が同じ? (答え:どちらもくだもの)」といった問題が問われる。また、ワーキングメモリーも、言語能力の影響を強く受ける。例えば語音整列という問題は「8, 1, る, え」といった数字とひらがなのランダムな組み合わせを「1, 8, え, る」のように数字の昇順とひらがなの五十音順に並び替えなければならない。ポルトガル語の場合はアルファベットである。これはひらがなやアルファベットに熟知していなければ

答えられない問題である。これらの問題の解答能力は明らかに言語能力に依存する。Riva et.al (2017)はワーキングメモリーの値についてのみモノリンガル児童と比べ低くなっていると報告しているが³、一時的なりミテッドな状況にあるCLD児童は言語理解とワーキングメモリーの値がモノリンガル児童に比べ低くなりがちなのではないだろうか。奥村・島田(2017)もCLD児童が日本語版WISCを受けた場合、日本語の力は全検査IQに影響するが³、中でも言語理解とワーキングメモリーで言語面での影響を受けやすいと述べている。すなわち、今回4名について見られたN型、すなわち言語理解とワーキングメモリーの値が下がる型が一時的なりミテッドの児童に典型的にみられる型であれば、今後の鑑別の重要な鍵になりうると考える。

(4)は通訳の問題である。この問題については通訳者へのヒアリングの域を出ないが³、言語理解については、通訳の依存度が非常に高まる。障害や知能検査の専門性のないボランティアが通訳に入った場合、翻訳ミスなどによって十分なパフォーマンスを児童から引き出せない可能性がある。逆に通訳の過程で意味を訳しすぎる恐れもある。もしバイリンガルテスターであれば、児童の反応に合わせて言語を切り替えたり、質問の表現を調整するなどして、児童のパフォーマンスを最大に引き出すことができる。高度な専門性のある通訳、またはバイリンガルテスターが関わらなければCLD児童の知能検査を正しく行うことは難しいといえる。

VII. まとめと今後の課題

本研究の結果、発達障害を疑われ、通級指導や特別支援学級に入っている日系CLD児童の中に、障害の疑いがない児童が含まれている可能性が示唆された。その原因として、検査言語が児童の強い言語ではない場合があること、バイリンガルテスターによって、Translanguagingに実施されていないことなどを指摘した。今後はこのようなバイリンガルテスターによるTranslanguagingな知能検査が一言語で実施された場合と比べどの程度スコアに差がでるかをより多くのCLD児童に対し調査する必要がある。また、CLD児童の知能の発達について、標準曲線が出される必要がある。本文中でも示したが、こうした大規模な調査により、N型が一時的なりミテッド状況に特有の型なのかが明らかになると予想される。標準曲線が出されることで、一時的なりミテッド調教と発達障害の鑑別も容易になると考える。

また、誤って発達障害に鑑別されているCLD児童もいるが³、実際に発達の遅れがみられる日系CLD児童がいるのも事実である。中川が³40-50名を対象に保護者面談調査を行った結果、特別支援の対象となっているCLD児童は就学前に十分に認知的発達を

促すための育児や保育がされていない傾向が見られた。さらにそうしたCLD児童の多くが日本生まれであり、その親も幼少期に来日し、十分な教育を受けていない傾向が見られる。実際、ヒデオの母親は日本の中学校を卒業しているが、日本語を十分に話すことができない。こうした環境要因の分析のためのさらなる調査も必要である。

また、最も重要なことは発達アセスメントによってCLD児童の苦手なところを明らかにし、苦手なところを伸ばすための(言語)教育プログラムを開発することである。CLD児童のための発達アセスメントの研究の発展と教育プログラムの開発と普及は、日本に限らず、世界中のCLD児童を預かる教育現場における喫緊の課題であろう。今後の課題としたい。

【謝辞】

本論文は公益財団法人博報児童教育振興会、第12回児童教育実践についての研究助成「外国にルーツをもつ特別支援学級在籍児童の複言語能力に関する調査研究」(研究代表者：松田真希子)の研究成果の一部である。

【注】

- 1 松田真希子(金沢大学国際機構留学生センター)、中川 郷子(カエルプロジェクト代表)
- 2 WISC-IVとは、ウェクスラー式知能検査のことで、世界中で利用される汎言語的知能検査である。5歳～16歳11か月の子供に対して実施可能である。

【参考文献】

- Anna Riva, et.al (2017) Cognitive profiles in bilingual children born to immigrant parents and Italian monolingual native children with specific learning disorders, *Neuropsychiatr Dis Treat.* 2017; 13: 109-116
- Cummins, J. 1979. Linguistic interdependence and the educational development of bilingual children. *Review of Educational Research.* 49, 222-251.
- 中島和子(2007)「ダブルリミテッド/一時的セミリンガル現象を考える」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』3.1-6.
- 松井智子(2017)「バイリンガル児・マルチリンガル児と発達障害」『バイリンガル・マルチリンガル子どもネット研究会フォーラム「つまずく子どものためのアセスメント」』配布資料
(http://harmonica-cld.com/wp/wp-content/uploads/2016/01/5_2017BMCNforum2_WEB.pdf)
- 日本版 WISC-IV 刊行委員会(2011)『日本版 WISC-IV 知能検査』. 日本文化科学社.
- J.C.Raven,杉下守弘・山崎久美子訳(1993)『レーヴン色彩マトリックス検査 日本語版』日本文化科学社.
- 田口 恒夫, 小川口 宏(1987)『ことばのテストえほん』日本文化科学社.
- 奥村安寿子・島田かおる(2017)「WISC その他—現場で必要なアセスメントツール」『バイリンガル・マルチリンガル子どもネット研究会フォーラム「つまずく子どものためのアセスメント」』配布資料
(http://harmonica-cld.com/wp/wp-content/uploads/2016/01/5-3_forum3.pdf)
- O García (2009) Education, multilingualism and translanguaging in the 21st century
Social justice through multilingual education, 140-158.

A “Translanguaging” developmental Assessment should be given to CLD children

– A study to distinguish between a developmental disorder and temporary double-limited –

Makiko Matsuda and Kyoko Nakagawa

Abstract

In recent years, a special-needs class of elementary school in Japan enrolls many CLD children who have roots in foreign countries. Generally, it is difficult for a CLD child to tell whether it is temporary double-limited or functional obstacle, and many cases are misdirected in a special-needs class. Especially in the Tokai area, which many Brazilian live children are enrolled in those classes. In this study, six Japanese Brazilian children enrolled in a special needs class of Japanese elementary school or seen as a developmental disorder are asked to investigate the language ability of Portuguese and Japanese, intelligence test in Portuguese and Japanese (WISC-IV) was conducted. As a result, there were two children who seemed to have no obstacles with both IQ and behavioral observation. In addition, it became clear that there is a possibility that CLD children appear performance linguistically complementarily. As a result, it was suggested that there is a need to conduct a developmental assessment by a bilingual tester.